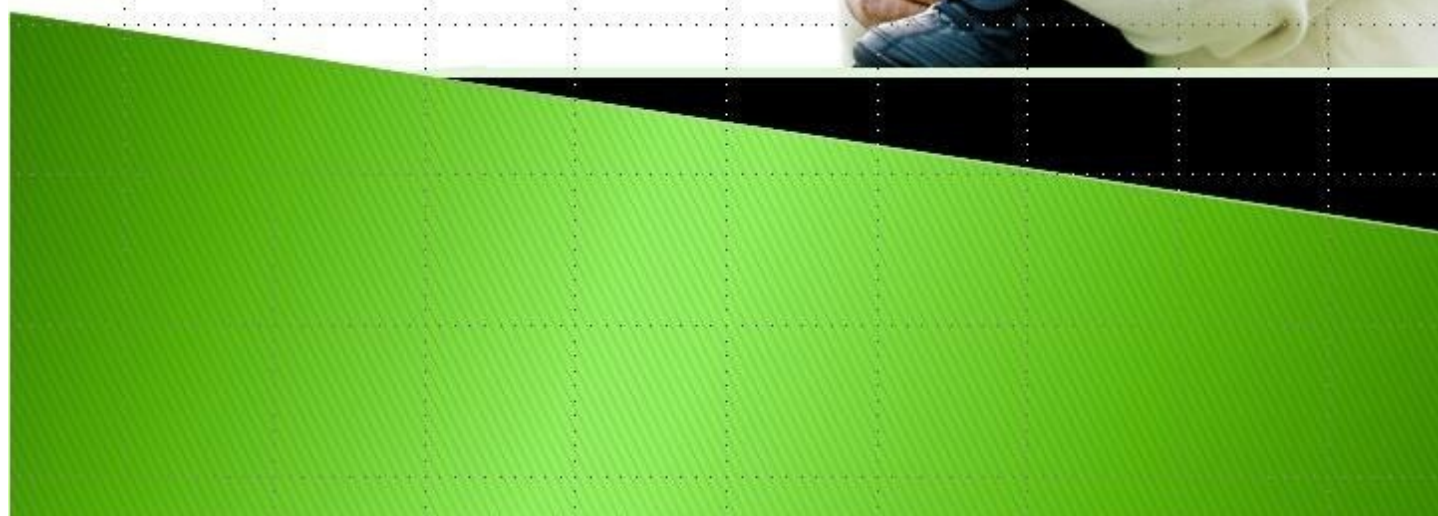
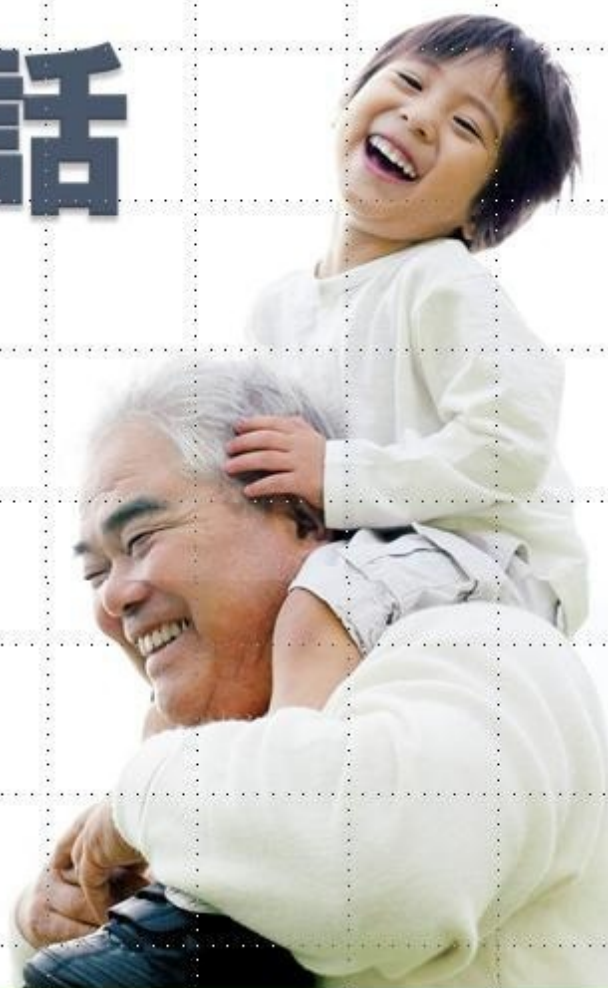


むかし、 じいちゃんから 聞いたお話

株式会社はびく
ファン促物語ライター
真喜屋 実行 (まきや さねゆき)



1) 進化と成長

むかし、じいちゃんが言った。

成長に直結することなんて、
そうそう見つからないんだって。

すぐ成長できそうなことばかりを
追いかけない方がいいって。

まだ10代だった頃、背伸びしたかったんだ。
子供に見られるのが、すごく嫌だった。

だから、
文章の最後を「である」にしてみたり、
難しそうなビジネス本を買ってみたり
同級生の行動を、幼稚だと批判したりしていた。

大人のふりをして。

ある日、ボクが縁側で本を読んでいると、
じいちゃんが近づいてきた。

どっこいしょって、
ワザとらしく大きな声を出して、隣に腰をかけた。

そして、こんな話があるって、
一人でしゃべり出したんだ。

～～ ～～ ～～ ～～ ～～

世界には、
わしらが知らんような所がいっぱいある。

アリの村、という所もあるそうじゃ。

ある日、
若いオスアリが、7人で漁に出そうじゃ。
7人乗ったら目一杯になってしまうような
小さい舟でじゃよ。

いつものように、
大きな魚を一匹釣れば、漁はおしまいなんじゃが
その日は、天気が悪くてのお。
なかなか釣れなかったそうじゃ。

そのうち、
風が吹き、雨も強くなった。

アリたちは、村に戻ろうと
オールを漕ぐんじゃが、思うように進まない。

必死で漕ぐけれども、自然にはかなわないものでな、
結局、波に流されて村の方角が分からなくなった。

何日も流されたあと、
アリたちは、ある島に流れ着いたんじゃ。
そこは、無人島。いや無アリ島じゃな。
草と木がいくらか生えているくらい。
とにかく、アリたちの他には、
生きているものは、何も見当たらなかった。

7人のアリたちは、どうしたと思う？

～～ ～～ ～～ ～～ ～～

じいちゃんは、
そう言って、顔をぼくの方に向けた。
ぼくは、黙っていた。

～～ ～～ ～～ ～～ ～～

それから、アリたちは
冬が近づいていることに気づいた。

そのままでしたら、凍えて死んでしまう。
皆、分かったようじゃ。

アリたちは、ケンカをはじめた。
こうなったのは、誰が悪いのかってなあ。

ケンカは何日も続いたけど、
いくら話でも結論は出ない。

そりゃそうじゃな。
原因が分かった所で、村には戻れんのだから。

アリたちは、
一人ずつその場を離れていった。

そして、思い思いの行動を始めた。
皆、何とかして助かろうと、それは必死になってなあ。

あるアリは、
もう一度船を作って、海に出ようとした。

あるアリは、
穴を掘って、寒さをしのごうとした。

木の葉を集めて、
温かい着物にするアリがいた。

洞窟を探そうとするアリ。
火おこしをするアリ。

他の生物を探そうとするアリ。

とにかく、皆助かりたくって
必死に動いたんじゃ。

～～ ～～ ～～ ～～ ～～

そこまで言って、
じいちゃんは、話を止めた。

どうなったの？
と聞くと、ぼくの目をじっとみてから言った。

「一匹だけ、残った」

どのアリが残ったのかは、教えてくれなかった。
それを聞いても、仕方がないそうだ。

ぼくは、
じいちゃんにもう一つ聞いた。

「他の6人のアリは死んじゃったんでしょ？
がんばってたのに、ムダだったの？」

じいちゃんは、ゆっくりと息を吸って、
もう一度、ボクの目を覗きこんだ。

「そう思うかい？ ムダだったと？」
「だって...、助からなかった」
「なら、
誰も何もしなかった方が良かったと思うかい？」

じいちゃんは、ゆっくりと立ちあがり
「そういうことじゃ」と言って、行ってしまった。

それが、
ぼくが成長することと関係あるらしい。

そう言うことなんだって。

10年くらい経って、
少しだけ、分かるような気がするんだ。
じいちゃんの言いたかったことが。

じいちゃん、
元気にしてるかな。

2) 「答え」は必要か

むかし、じいちゃんが言った。

「答え」を教えてもらわない方がいいこともあるんだって。

じいちゃんは、
いつもぼくに、ヒントのようなことを言うけど、
「答え」は言ってくれなかった。

ぼくが「答え」でも、にやっと笑うだけ。

だから結局、それが合っているのかどうか、
ぼくには分からないんだ。

ある時、じいちゃんが縁側で本を読んでいるのを
つかまえて、聞いてみた。
そうしたら、じいちゃんは、こんな話をしてくれたっけ。

~~~~~

ある下町のレストランに  
2人の新人ウェ이터が、研修生として入ってきたそうじゃ。  
Aくん、Bくんとしとこうか。

2人には、それぞれ先輩ウェ이터がついて、  
仕事を教えてくれることになった。

もの覚えには、どうしても人によって差はあるが、  
2人とも、先輩の言うことを聞いて、必死に頑張っていたそうじゃ。

ある日、予想外に、お客さまが多くいらっしゃって  
ひっくり返るほど忙しい日があったらしい。

ホールのウェイターだけじゃない、  
キッチンのコックさんたちも、ビックリしてあたふたしていた。

そんな状況だから、失敗だって起きる。

あるお客さまが、Aくんに対して、クレームをつけたんじゃ。  
「このお肉、火が通っていない！」とな。

Aくんが、テーブルに置かれたお肉の切り口を見ると、  
ブタのお肉なのに、まだ赤くて、血がじゅわ〜っと流れ出ていたんじゃ。

マズイ、と思ったAくんは、すぐさま先輩ウェイターの所へ行った。  
先輩も、それを聞いて青ざめ、すぐにお客さまのテーブルへ行き、  
謝罪し、すぐに作り直すよう申し出た。

そして、  
キッチンへ向かう途中、先輩はAくんに行った。  
「今の言葉、メモっておけよ」  
とな。

一方、Bくんじゃ。

そんな忙しい日じゃからな。  
Bくんの方でも、同じようなことがあった。

Bくんは、お客さまに呼ばれた。  
「このお肉、全然火が通ってないじゃない！」

Bくんは、口をあわあわとさせて、急いで先輩ウェイターの所へ行く。  
先輩は、それを聞いて青ざめ、すぐにお客さまのテーブルへ行き、  
然るべき対応をした。

そして、キッチンへ向かう途中、 Bくんは聞く。

「こう言う場合は、謝って、すぐに作り直すように言うんですね」



しかし、先輩は、何も答えてくれない。

お店が落ち着いてから、Bくんは、もう一度先輩に尋ねてみた。

しかし、先輩は、その質問に答えようとしなない。

じっとBくんを見て、こう言ったそうじゃ。

「Bはどうしたらいいと思う？」

Bくんは、そう言われるとは思っておらず、

さっきの対応でいい、としか答えられなかった。

先輩は、少しの間、Bくんの目を見てから、立ちあがって行ってしまった。

~~~~~

じいちゃんは、そこまで話すと、ふう〜っと、大きく息を吐いた。

「Aくんの先輩と、Bくんの先輩、どっちにつきたい？」

「う〜ん、Aくんの先輩かな。ちゃんと教えてくれて、安心なもの」

じいちゃんは、そうかなと言って、またお話を続けた。

~~~~~

それから数カ月、2人は研修期間を終え、

別々のお店に配属になったんじゃ。

忙しい日には、どうしても失敗が起こる。

また、以前と同じ事が起こったんじゃ。「お肉に火が通ってない」とな。

Aくんは、先輩が言っていた言葉を思い出した。

「申し訳ありません。こちらの不手際です。すぐに新しく作らせて頂きます」

これで大丈夫と、キッチンの方へ振り返ろうとすると、  
お客さんは、顔を真っ赤にして、怒り出したそうじゃ。

「何いってんのよ！アタシは時間がないの。

新しいのを待つ時間なんて無いわ！どうしてくれるのよ！！」

予想していなかったお客さまの反応に、  
Aくんは、どうにも動けなくなってしまったそうじゃ。

そして、お客さまは、  
真っ赤な顔のまま、お店を出て行ってしまった。

Bくんかい？

Bくんにも、同じことが起きたよ。  
同じミスばかり、困ったお店じゃな。

Bくんは、お客さまの顔色を伺い、言ったそうじゃ。

「申し訳ありません。こちらの不手際です。

新しく作らせて頂きたいのですが、どうしても、お時間がかかります。  
もし、お急ぎでしたら、早くお出しできるものを確認して参りますが、  
どうさせてもらったらよろしいでしょうか？」

~~~~~

じいちゃんは、ぼくの顔を見た。
ぼくは少し考えて、聞く。

「じゃあ、Bくんの方が良かったってこと？」

じいちゃんの白い髭が少し上がった。

「答えを教えてもらわなかったBくんの方が良かったってこと？」

「...さあ、どうだろうね」

じいちゃんは、小さく笑い声を出した。

ぼくも、口元を上げて笑ってみた。

もう10年以上前のことだ。

まだ、答えは教えてもらっていない。

じいちゃん、

ぼくの考えであってるかな。

3)大きな水車を動かすには

もう10年以上も前のことだ。

ぼくは、クラスの「いきものがかり」だった。

ある雨の朝、登校すると、
校門の横に、手のひらサイズのカエルが座っていた。

先生に相談すると、クラスで飼えることになった。
いきものがかりのぼくは、毎日、必ずエサをあげた。

いつも、ぼくがエサをあげた。

クラスメイトがカエルに注目したのは、はじめの3日間だけ。
4日目からは、カエルの友達は、ぼくだけだった。

だから、
エサをあげるのは、当然のように、ぼくのしごとだった。

カエルは、ぼくが近づくと、ケロケロと声を出す。
それはなんだか、寂しそうな声にも聞こえた。

それから数日して、
ぼくは、クラスに提案をした。

みんなで、順番にエサをあげてくれないか。
カエルが寂しそうなんだ。

それでも、
エサを上げるのは、やっぱりぼくのしごとだった。
クラスメイトは、だれも、動いてくれない。

ある日、家に帰って、そんなことを母親に話していると、
じいちゃんが、近づいてきた。

「坊、大きな水車を動かすには、
水が流れやすい所を探しなさい」

じいちゃんは、そう言う。
ぼくは、じいちゃんに「坊（ぼう）」と呼ばれていた。

~~~~~

ここに、大きな水車がある。  
何とかこの水車を回したい。

坊なら、どうやって回すかい？

~~~~~

じいちゃんは、
ぼくが答えるのを待った。

ぼくは、
じいちゃんが続きを話すのを待った。

~~~~~

今、坊は水車の低い位置の歯車に手をかけて、  
何とか持ち上げて、回そうとしている。

それじゃ、とても持ち上がらんわい。  
重くてピクリとも動かない。

持ち上げるのは大変じゃが、  
水車の逆側、上から降りて来る部分に  
手をかけてぶら下がって見たら、どうじゃろうか？

回り出すよ。  
少なくとも、持ち上げるより力はいらんわい。

~~~~~

「それが、関係あるの？」

じいちゃんに聞いた。

「力が伝わりやすい所を見つけたら
きっと、水車は回り出す」

じいちゃんはそう言って
自分の部屋に戻っていった。

翌日、カエルの水槽を覗いているクラスメイトをつかまえた。
皆が関心のない中、彼は時どきカエルを見ている。彼に、直接頼んでみる。

週に1回でいいから、
エサをあげてくれないか。

彼は、おどろくほどあっさりと了承してくれた。
むしろ、喜んでいる風にも見えた。

それから、
ぼくがエサをあげる回数は減っていった。
カエルが声を出す回数も、増えていったと思う。

だいぶ前の話だ。

じいちゃん、
この話、いろんなことに応用できそうだね。

4)食えないと思ってから、もう一杯食べ(前編)

家族で、盛岡に旅行に行ったときのこと。
思い出だからと、全員で「わんこそば」に挑戦した。

じいちゃんと母さんは、20杯いかに終了。
父さんも、40杯でギブアップ。兄さんは、頑張ったけど67杯。
ぼくひとりが、残った。

もう少し、食べられそうだ。

1杯のそばを口に入れると、次の瞬間には、後ろで構えているお姉さんが、「おかわり」を放りこんでくる。90杯を越えると、さすがに、もうのどを通らない。

そろそろギブアップしようと、右手奥にある、ふたの位置を確認した。
この一杯を食べたら、ふたをしてギブアップするんだ。

目だけを後ろに動かして、お姉さんの様子を確認すると、次の「おかわり」を持って構えている。彼女は、間違いなく、ぼくのギブアップを阻止しようとしている。

チラッと横を向いて、「あ」と声を出してみた。
しかし、彼女は微動だにしない。ぼくのお椀だけを見ていた。

スキはない。
真っ向勝負しかない。

息をふう〜と吐いて、ぐっと止める。
そして、素早く96杯目のお椀を口元に近づけ、箸で一気にかきこむ。右手で、箸を机に叩きつける。そして、ふたに手を伸ばす。チラリと後ろを見る。彼女の手は、いま動き始めたところだ。
。

勝った！ 間にあう。
これで終了だ。

お椀にふたが乗ろうとした時、
異様な音が聞こえた。

きええええええええ〜〜!!

右後ろを振り向くと、じいちゃんが、何やら剣道の早素ぶりをしている。
どうしたんだ、こんな時に。
かなり、早い。

顔を前に戻すと、すでに、97杯目のおそばが入っていた。

「じいちゃん！！ また、入れられちゃったじゃん！！」
「うむ」 じいちゃんは笑う。
「何がうむだよ！ぼくは、もう食べられないんだよ！」
「うむ、だからもう一杯食べ」

ぼくが怒るそばで、じいちゃんは、胃袋の話始めた。

「坊、胃袋の伸びを知っているかい？ 『満腹だ』って思ってからでも食べ続けると、数日で袋が伸びて大きくなるんじゃ。前よりも、たくさん食べられるようになる。逆に、腹8分目を続けると、胃袋もちっちゃくなって、食べられなくなる」

別に、胃袋が大きくなる必要はないと思った。

「そうじゃない...」
「じいちゃんなんて、20杯も食べてないじゃん。そんな人に言われたくないよ」

じいちゃんの顔がゆがんだ。
悲しそうに下を向き、顔を何度も振った。

「じいちゃんなんて、口だけじゃん」
「そうじゃない...そうじゃないんじゃ...」

後味の悪い旅行だった。
それを後にして、じいちゃんの口数が、だいぶ少なくなった。

じいちゃんと言おうとしていたことが
分かったのは、もう少し経ってからだ。

クラスメイトのヨシオくんを見て、じいちゃんと言おうとしていたことが、なんとなく分かった気がするんだ。

(後編につづく)

5)食えないと思ってから、もう一杯食え(後編)

こないだの続き。

ヨシオくんの話ですこし。

ヨシオくんは、少しぽっちゃりした体型で、運動神経は良くなかった。

運動会では、いつもビリ争いだけど、必死に走っていた。

鬼ごっこをすると、ず〜っと鬼だけど、必死で追いかけてきた。

そんなヨシオくんが、嬉しそうに話してくれたんだ。

地域のミニバスケットチームに入ったと。

ぼくは、内心バカにしていた。

ヨシオくんがバスケなんて、似合わない。

どうせ、下手くそだよ。

バスケの練習があった翌日は、ヨシオくんは、必ずその話を聞かせてくれた。

ぼくが聞かなくても、話したくてしかたないようで。

毎週のように話を聞いていると、ぼくは少しだけ、焦りの気持ちを感じるようになった。

もしかしたら、ヨシオくんて、

バスケがうまくなってるんじゃないか。

ヨシオくんが、上達することが嫌だった。

下手くそそのままできてくれた方が、安心だった。

ある日曜日、お母さんとの買い物の帰りに、小学校の近くを通った。

すると、体育館から声が聞こえてくる。バスケをやっているようだ。

先に言ってと、ぼくは、体育館に寄った。

下手くそなヨシオくんを見るために。

開いている窓からのぞくと、他校との試合中だった。

ヨシオくんが出ている。「16」という番号のついたユニホームを着てボールを追いかけている。

必死に走ってボールを追いかけるけど、相手には抜かれてばかり。
味方も、パスはくれない。誰の役にも立っていないように見えた。

ヨシオくんは、両手をひざにやり、ぜ～ぜ～と息を切らせる。
もう、足がついていかない。2回続けて自分の足につまづいた。
結局、一度もボールに触れないまま他のメンバーと交代した。

ぼくは体育館を出て、母を追いかけた。
足と心は、軽くなっていた。

その後も、バスケットがある度に、ヨシオくんは話を聞かせてくれた。
バスケットが面白くてたまらないんだって。 いつか、活躍できる選手になるんだって。

でも、ぼくは分かっていた。
ヨシオくんには、そんな選手にはなれないって。
だって、運動神経が悪いんだもの。
ぼくは安心していた。以前に感じた少しの焦りは、もうキレイに消えていた。

それから1年くらいが経った。
別々のクラスになったので、ヨシオくんと話す機会は、ほとんどなくなっていた。
ぼくも、ヨシオくんのことを気にかけることは無くなっていた。

ある日曜日、お母さんとの買い物の帰りに、小学校の近くを通った。
すると、体育館から声が聞こえてくる。

なぜか気になり、体育館へ向かった。

ヨシオくんはどうなっているのか。
どうせ、上手くなってはいないと思うけど。

窓からのぞくと、また、試合中だった。

すこし痩せたヨシオくんは、「7」の番号のついたユニホームを着ている。
ヨシオくんは、やはり必死の顔で走っていた。汗を飛び散らせてボールを追いかけている。

そこで見たヨシオくんは、以前とは違った。確実に。

ヨシオくんは、相手に抜かれない。

味方は、ヨシオくんにもパスを渡す。

そんなヨシオくんに、ボールが渡った。
ゴールの方を振り向き、ボールを掲げる。シュートする体制に入った。

相手も手を上げ、ジャンプしてシュートを阻止しようとする。
その瞬間、ヨシオくんはさっと体を縮め、相手の右脇を抜けた。
そして、そのままランニングシュートを決めた。

1年前のヨシオくんとは違った。
確実に違った。

試合が終わるまで、その場を離れられなかった。
何かがふるえていた。ヨシオくんの姿を見て、ぼくはふるえていた。

それからだ。
ぼくが必死になったのは。

限界を越えるまでやらなきゃいけない。
力をセーブしていたらだめだ。

じいちゃんが言いたかったことは、
そういうことじゃないのか。
わんこそばの時のことが蘇った。

もう、だいぶ前のことだ。

じいちゃん、ヨシオくん。
おかげで、わんこそば250杯食べられるようになったよ。
これでいいんだよね？

ほんとかな...。
実は、少し不安です。

じいちゃん。

5) オカミ少年

じいちゃんは、よくお話をしてくれた。
でも、そのお話はいつも、
本で読むのとは、少しだけちがった。

ボクが小学5年生だったある秋の日、
「今日は宿題は出なかった」と母にウソをついて遊びにでかけた。
夕方、家に帰ると、母は顔を真っ赤にして玄関の前で待っていた。

「ウソをつくような子は、ウチの子じゃありません！」

勢いよくしまった扉は、いくら引いてもいくら叩いても、もうピクリとも動かない。
軒下に座り込むと、涙がでてきた。

どのくらい経ってからだろう。
扉の向こうから、ボクを呼ぶ声が聞こえてくる。

「坊、どうしたんじゃ」

じいちゃんだ。
いきさつを話すと、じいちゃんは、あるお話をしてくれた。
ボクは、扉に耳を近づけた。

~~~~~

ある田舎の老舗旅館には、10歳になる少年がいた。  
オーナーのひとり息子で、わがまま放題のいたずら好きの子だ。

少年は、ヒマになると「遊び」を思いつく。

「オカミが来たぞ～！  
みんな、オカミがこっちに向かってきたぞ～」

少年が、大声で叫びながら廊下を走り回ると、  
それまでのっそりと掃除をしていた仲居はキビキビを動き出す。

調理場の板前たちがかけあう声は、一段と大きくなる。

しかし、オカミは一向にやってこない。  
それもそのはず、少年のウソなのだから。

少年には、仲居や板前の反応が面白かった。  
味をしめた少年は、別の日にまた同じことをやる。

「オカミが来たぞ～！  
オカミが、こっちに向かっているぞ～」

またもや、従業員たちは慌てだす。  
仲居の掃除スピードは上がり、板前の手さばきは早くなる。

しかし、やはりオカミはやってこない。  
少年は、ひとりで笑い転げている。

少年は、いよいよそれが面白くなった。  
また、別の日に同じことをやる。

「オカミだ～！  
今度はホントにオカミが来てるぞ～！」

しかし、今回は仲居や板前たちも  
別段慌てた様子を見せない。  
チラッと少年の方に視線を向けると、  
また、先ほどまでと同じように、ゆっくりと仕事を続ける。

つまらない。  
少年は少し考えて、また大声をだした。

「大オカミだ～！  
大オカミが来たぞ～」

大オカミとは、オカミの母親でさらに怖い存在だ。  
それでも、仲居や板前たちはびくともしない。  
少年はまた、言葉を変える。

「オカメが来たぞ～、こわ～いオカメだ～」  
「ワカメが来たぞ～、ぬるっとしたワカメ～」

仲居や板前たちは見向きもしない。  
少年の顔には血がのぼり、赤くなってきた。

「オナベが来たぞ～」  
「オカベが来たぞ～」  
「オカピが来たぞ～」  
「オカッパが、オバケが、オマケが、オサケが、ナサケが、  
サスケが、バスケが、ナスカが、アスカが、チャゲが、  
ヒゲが、モゲが、モサが、フサフサが、ワサワサが、  
クサクサが、クサヤが、リキヤが、リキシが、タケシが、  
タカシが、ポカシが、ポカリが、ポッカリと、モッキリと、  
モッコリと……」

いくら言っても、従業員たちは動じない。  
少年の言葉など聞こえていないようだ。

「もうっ！つまんないなっ!!」

少年は、足元にあったゴミ箱を、思いきりけりあげた。  
それは、大きな音を立てて勢いよく転がる。

すると、目の前にいた若い板前の表情が変わった。  
大きく目を開き、唇をブルブルと震わせはじめた。

「あ、ああああ…」

怖がっている。  
少年のおどかしが、ようやく効いたようだ。

少年はそれで満足した。  
自分の部屋に戻ろうと後ろを振り返ると、  
どんと大きな物体にぶつかった。

その瞬間、少年の体が浮く。

首のうしろ根っこをぐっと掴まれ、勢いよく吊りあげられた。

少年の顔の数センチ前で、  
血走ったが目が大きく見ひらいて、睨みつけている。

「誰が、リキヤじゃあ〜」

少年は、オカミの迫力にまったく動けなかった。  
オカミが一番気にしていることを、  
知らぬ間に口にできてしまっていた。

~~~~~

「きいたか、坊」

扉の向こうから、じいちゃんが聞いてくる。

「うん……」

「何を言いたいかわかるか」

「う、うん……」

「なんだ？」

「ウソは……、

2回までしかついちゃダメ……ってこと？」

すこし、沈黙があった。

「坊は、今日で何回目じゃ？」

「…3回」

向こうから、大きなため息が聞こえる。

「分かったんじゃな」

「うん」

じいちゃんが立ち上がる音が聞こえた。
それから少しして、玄関の扉はあいた。

それからボクは、学校から帰ると、真っ先に宿題を終わらせるようになった。
そうすれば、胸を張って堂々と遊べる。

ある日、宿題を終わらせてから、友達の家で自転車を走らせていると、
公園の隅にじいちゃんらしき頭を見つけた。

その頃のじいちゃんは、
夕方ひとりで散歩に行くのが習慣だった。

じいちゃんの頭は、後ろから見ただけでもすぐにわかる。
頭のとっぺんに、地図のような染みがあるから。

じいちゃんは、ベンチに腰をかけ、頭を斜めにしていた。
自転車で近寄っていくと、その隣に、もう一つ頭を見つけた。

ロマンスグレーの頭、じいちゃんより少し若い初老の男。
じいちゃんの地図頭は、ロマンスグレーの方に傾き、その肩に乗っている。

ブレーキをかけたけど、間にあわなかった。
勢いでじいちゃんの前まで飛び出た。

じいちゃんは、びくっと背を伸ばし、手を自分の体に引き寄せる。
ロマンスグレーの男の右手は、まだ握ったままの形をしていた。

「じいちゃん...？」

「坊...」

しばらく、沈黙があった。

「見たのか...坊」

ボクは、ゆっくりとうなずいた。

じいちゃんは、声を低くした。

「坊、これはじいちゃんの1回目じゃな？」

それから、

じいちゃんはそれまで以上に優しくなった。

じいちゃん、1回目が重すぎるよ。

やっぱり、1回目でもダメだ。こんなのはダメだよ。

じいちゃん、ボクのために身をもって教えてくれたんだよね？

ボクのため、だよね……？

『むかし、じいちゃんから聞いたお話。』

<http://p.booklog.jp/book/31665>

- 著者 : 株式会社はぴっく
物語ライター 眞喜屋 実行 (まきや さねゆき)
- プロフィール : <http://haps.chu.jp/gaiyou.html>

- 著書 : 『ひたむきな人のお店を助ける 魔法のノート』
(ぱる出版さん 2011年6月) <http://amzn.to/iyJnSe>



ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31665>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.